



みやざき

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の今後

位 田 晴 久

国際協力は日本も元気にする

勝 田 幸 秀

「アフリカの大地に魅せられて!!」

小 野 睦 一

マーシャル諸島での協力隊活動と帰国後

岩 切 康 二

アルゼンチンでの国際協力に携わって

乗 峰 潤 三

宮崎大学での勤務を振り返り、思うこと

吉 成 安 恵

「宮崎から世界へ! GLOBALINK

—世界とつながっている私達2014—」

崎 田 佳 予 子



宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の今後

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長

宮崎大学農学部植物生産環境科学科 位 田 晴 久

平成25年度総会におきまして前会長永田雅輝先生から御指名を受け3代目に就任致しました位田です。本連絡会をさらに発展させていくため微力を尽くしたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願い致します。1994年の発足当初から本連絡会の幹事を務めさせて頂いており、20年を経過しグローバル化がより声高に言われるようになった中での本連絡会の今後について少し考えてみたいと思っております。発足時は会員18名でしたが、年を経るごとに派遣専門家の数も増え、一時は60名を超えました。しかし近年は技術協力プロジェクトの変貌もあり、御逝去や御転居の方々から新たな会員を上回り微減傾向にあります。JICAに対しては、取り組みやすいミニ技協プロなどの提案などもさせて頂いてはいますが、一気に会員数が増えるのを望むのは困難ですので、現員によりいかに活性化を図るかが大きなテーマとなります。

前会長の強力な指導力の元、連絡会総会は貴重な

講演をはじめ交流を深める場として大いに機能してきました。ご講演頂いた方々やご参加頂いた方々に厚く御礼申し上げます。これまでも、会員外の方にご講演を願ったりする機会を設けてはきましたが、さらに踏み込んで、最近の幹事会、打ち合わせ会ではJICA宮崎デスク、宮崎県青年海外協力隊を支援する会、宮崎県海外協力協会（青年海外協力隊OB/OG会）などJICA関連団体にもご参加頂き、今後に向けての貴重なご意見を賜っています。具体的にはさしあたって上記JICA関連団体の総会への相互乗り入れを図り、JICA派遣専門家連絡会総会にはあいにく都合が付かなくても、他の総会で連絡会会員とも親交を深めてもらえるようにする、また組織を確固たるものにするため規約の整備を図る等です。

微増しているとはいえ、まだまだ他府県に比べ県内在留外国人数が少ない本県にあっては、県民の皆

様、特に若い世代の人々に触れ合う機会を提供するかが大きな課題であると考えています。その意味から、イオンモール宮崎にて開催された、県内国際協力NPO/ NGOの4団体の合同イベント「宮崎から世界へ！GLOBALINK」などはとても有意義であったと思います。本連絡会からは佐伯幹事に深く関わって頂きました。また、私が属する宮崎大学では、学長がグローバル化推進に非常にご理解があり、いろいろな取り組みがなされています。その一つとして「国際協力入門」という全学共通教育科目があり、宮崎大学国際連携センター副センター長の立場から私も担当させて頂いていますが、専門家として派遣

時の各国での活動の話の他、留学生に英語で自国紹介をしてもらっており、学生は目を輝かせて聞いています。また、留学生と英語で懇談する「グローバル喫茶」でも大野幹事が頑張ってくれています。これらに対し、学外の専門家の方々にもご助力を賜りたいと考えているところです。

さらに今後はJICA関連団体のみならず、県内の70を超える国際交流・協力団体とも、より連携を深めていきたいと考えています。本連絡会の活動が、宮崎、九州、日本の国際協力の発展に貢献できるよう、関係各位の皆様方のご支援ご高配のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。



国際協力は日本も元気にする

独立行政法人 国際協力機構
九州国際センター 所長 勝田 幸秀

昨年の3月にJICA九州の所長としてJICAタンザニア事務所より着任しました勝田です。宮崎県専門家連絡会におきましては初登場となりますので、皆様どうかよろしくお願い申し上げます。

さて、まもなく着任後1年を迎えようとする中、現在のJICA九州の最大のテーマは、JICAの活動を通して途上国だけでなく、九州を、日本を、どうやって元気にするかということです。

こういうお話をすると、最近の日本の経済事情からいよいよJICAも内向きになってきたかと思われる方もいるかと思えます。でもこれは60年前に日本が国際協力を開始した時から（余談ですが今年は日本のODA開始60周年にあたる記念すべき年です）引き継がれてきたもので、時代の流れとともに程度の差こそあれ、途上国を援助しながら、私たちは即物的な短期の利益から、風が吹くと桶屋が儲かるような間接かつ長期的な便益も含めて、日本への還元を常に求められてきました。

また、最近のJICAで事業が拡大している民間連携事業を想像する方もいらっしゃるでしょうが、日本を元気にする国際協力はこれに限ったことではありません。帰国した青年海外協力隊のOV達が、どれ

だけイキイキと地域や社会の安定と発展に向けた生き方をしているか。また、この機関誌を読まれている帰国専門家の方々も、専門家としての貴重な経験を社会に還元されようとして連絡会に集っておられます。更に言えば、国内で研修員の受入や国際交流事業を行っている団体、その活動の一環として研修員の訪問を受けた工場や試験場、農家のオバチャンまでもが元気になっている、という事実があります。

いったいそれはなぜでしょうか。言葉はもちろんのこと、生活も文化も異なる人たちと交わり、通じ合うことによって、何か感じるものがあるのでしょうか。それが「思い」となって、活動の糧となり、人格的にも高められるのでしょうか。私はこれまで、国際協力に従事する多くの尊敬すべき人々に出会う機会に恵まれてきました。いつかはあのような、素晴らしい人間性を備えた人物になりたいと思いながら、年月ばかりが過ぎていきます。

一方で、熱い気持ちや思いだけで、国際協力はできないというも事実です。先日、東南アジアのある国に新たに工場を開設するという宮崎県の企業の方とお話をする機会がありました。その方は、全くの手探りの状態で、何もわからないまま海外進出を決

断したそうで、その理由はただ一つ、厳しい価格競争にさらされる国内の生産と雇用を守るためだと言われました。その会社はJICAの制度を利用したわけではありませんが、JICAも民間企業の途上国への進出をお手伝いする仕事をしています。

援助実施機関であるJICAが行う民間連携事業は、途上国にとっても、技術や製品を提供する日本企業にとっても有益な事業となる、ウィン-ウィンの関係を築くことをめざしています。

先ほどの企業の例では、現地での雇用の増大や経済発展に貢献しながら、国内の雇用や事業はしっかり守っています。近年、途上国の発展は援助だけでなく、民間企業や民間資金による経済の活性化や雇用の増大によってもたらされる割合が高くなってきています。そこでJICAは、これまでの途上国支援の経験や現地でのネットワークを活かして、途上国に進出しようとする民間企業を支援し、日本の技術を活用したODA案件につなげたり、ビジネスペー

スでの活動へと導くことを通して途上国の発展を図ろうとしています。

先に述べました、従来からの専門家派遣や研修員の受入、青年海外協力隊をはじめとするボランティアの派遣などによって日本を元気にすること、同時に途上国の発展に大きな役割を果たすようになった民間企業の活動をJICAが支援することによる日本の活性化、今のJICAはこの二つの柱を、別個に行うのではなく両者を絡み合わせて、途上国も日本も元気にする活動を行っています。

JICAはJICAだけでは国際協力を行うことができません。現場で実際に汗を流している専門家やボランティア、企業の皆さんの活動によって初めてJICAの存在を認めてもらうことができます。より多くの人たちとともに、途上国への支援を通して、宮崎を、九州を、日本を元気にするJICAに、これからもご理解とご協力をいただきますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。



「アフリカの大地に魅せられて!!」

宮崎県青年海外協力隊を支援する会会長
九州海外協力協会顧問 小野 睦一

A. 旧OTCA（現JICA）中近東・アフリカ技術協力計画による派遣柔道専門家

○個別派遣専門家氏名：小野 睦一

○派遣国：旧ザイール共和国

（現コンゴ民主共和国）

○派遣期間：1972年9月～1974年10月（2年間）

○任国所属先：青年スポーツ省

○指導科目：柔道指導者

○本邦所属先：旧OTCA（現JICA）派遣事業部

1. 要請内容

- ① ザイール全土（29カ所）及び首都キンシャサ市内（15カ所）の柔道クラブ間の巡回指導を行い、正しい柔道技術の普及を図る。
- ② クラブ間の試合を通じて国際的なレベルアップを図る。

- ③ ザイール柔道連盟の組織強化を図り、ナショナルチームの編成とナショナル道場の開設推進

2. 活動内容

- ① 毎夕方（17：00～21：00）、首都キンシャサ市内15カ所の道場を巡回指導し、各道場の抱える問題点の把握に努めた。
- ② 各クラブの共通の問題点：
 - i. 道場が狭く30畳に満たない程度である為、十分な稽古ができない。
 - ii. 柔道着が不足し、中には裸や平服のクラブ員もいて正しい柔道の組手ができない。
 - iii. 各柔道クラブ間の距離がある為、道場間の交流は困難を極めた。
 - iv. 現地人道場は雨が降ると雨漏りがして使えない事が多かった。

V. 白人専用道場2カ所（IBM道場、ベルギー

学校道場)は、共に立派で観覧席、シャワー、及びJUDO BAR等設置されていた。

3. 成果

- ① 第一義的にザイール柔道界の窮状を受け入れ先の青年スポーツ省へ直訴したが資金的な面も含めて困難であった。
- ② 上記①を受けて、日本大使の理解と協力の下、同国モブツ・セセ・セコ大統領、マシヤラ軍最高司令官及び柔道クラブ員の一人であるルンツ中央銀行総裁等に働きかけた。
- ③ これによりナショナル道場の開設とナショナルチームの編成を即刻行うことができた。
- ④ ナシヨ道場開設により、第1回ザイール柔道選手権大会を国内29カ所の柔道クラブ参加の下、開催した。
- ⑤ 大統領がザイール柔道選手権大会観覧後、大統領護衛隊及び警察官の指導の要請を受けた
- ⑥ 日本人会防犯委員長の任命を同会から受け、教え子の警察官の協力の下、日本人会のイベントや同国治安悪化に伴う邦人や大使館員の保護を行った。
- ⑦ 現カビラ政権においても治安悪化は続いており、JICAは南南協力にてコンゴ民主共和国の警察官研修を南アフリカで行っている。
- ⑧ 半世紀を経た今、当時の教え子の成長した消息が判明：先般JICAは農業開発のための事前調査団を派遣し、終了時のS/W(事業内容等)署名時に双方の意見の食い違いから、不署名となった。2回目の調査団派遣時、先方のコンゴ側政府代表M.OKITOが私は昔OTCA派遣の小野先生から柔道と国際ルールを習った生徒である事を告白し、今日はJICA調査団の皆さんと共に双方の理解に努めたいと言って、S/W署名がスムーズに行われた。
なお、同氏は、当時から半世紀の時空を超えて、現在同国農業省次官の要職と現在アフリカ中南部柔道連盟会長(柔道6段)へ就任し、大きな成長を成し遂げ活躍中である。
- ⑨ 2年間の同国在任中、日本の8大商社から柔道衣の寄贈及びナショナル道場開設に当って資金援助を頂いたご支援ご協力に対し、今も感謝の念で一杯である。

B. モロッコ鉱物資源探査技術向上プロジェクト (総合報告書より一部抜粋)

- 専門家氏名：小野 睦一
- 派遣国：モロッコ王国
- 任国所属先：BRPM(鉱山探査投資公社)
エネルギー鉱山省(所掌)
- プロジェクト協力期間：1998年4月1日～
2002年3月31日(4年間)
- 指導科目：チーフアドバイザー
- 本邦所属先：JICA鉱工業開発協力部
- 総合報告書作成：2002年3月31日

I プロジェクトの概要

1. 要請の内容及び協力の背景

モロッコは大きく農業・水産に依存した不安定経済体質を改善し、鉱業分野を強化して安定経済成長を目指している。我が国はモロッコ・鉱山探査投資公社(BRPM)に対し、これまで個別専門家派遣、青年海外協力隊(地質、SE等)、ミニプロジェクト及び開発調査等技術協力を実施してきた。

この度、モロッコは広い分野での技術レベルを求めるものとして、BRPM研究所におけるプロジェクト方式技術協力を要請してきた。

II 配属機関の受け入れ体制

1. 配属機関及び業務の形態

鉱山探査投資公社(1928年設立)：総裁：総務・経理局、技術・投資局、探査局(窓口)：1課3部(総務課、探査手法・計画部、実施部、スタッフセクションJICAプロジェクト、研究・鉱部)：Bureau de la Recherches et de Participation Minieres(BRPM)

2. スタッフセクション(C/P)：32名

3. 便宜供与：専属運転手2名、専属秘書1名、技師補助2名、マニュアル専属担当技師1名、専門家執務室6室(長期4室、短期1室、秘書1室)

III プロジェクト要約

1. 目標

- ① 最上位目標：モロッコの工業が発展する。
- ② 上位目標：モロッコ国内で新たな鉱物資源が開発される。
- ③ プロジェクト目標：BRPMが組織的、実践的な探査を継続的に実施できるようになる。

2. 成果

- ① 探査局の組織運営が強化され効率的に機能する。

BRPM組織内へ総合探査技術の普及浸透を図るため設立されたスタッフセクションが機能し、探査局の組織運営が強化されプロジェクトの目的達成及び運営・管理に対し、良い影響を与えられた。

- ② 分析装置が効率的に稼働し、適切に維持管理される。

IPC&POSAMがBRPM技師及び専門家の採取した試料サンプルを効率よく分析し、順調な稼働が行われた。又両装置における操作・保守・分析・管理もBRPM技師によって十分可能となった。

- ③ モデル地域の現地調査における専門家及びC/PとのOJTにより、効率的な探査計画の下、実践的な探査手法により技術移転が行われ、総合的な探査手法が可能となった。併せて総合解析報告書の作成も行われた。

- ④ 探査マニュアル本・表題「METHODS ET TECHNIQUES D'EXPLORATION MINIERE ET PRINCIPAUX GISEMENTS AU MAROC」：「モロッコの鉱床探査手法と技術及び主要な鉱床」作成は、専門家指導の下、その殆どがモロッコ人技師によって執筆された。これによりモロッコの鉱床生成の理論、探査手法、国内のインベントリー及び主要鉱床等が明らかになった。併せてその達成感と自信を勝ち得た意義は大きく、今後の業務遂行へ好影響を与えるものと思われる。

- ⑤ 各種セミナー開催48回（4年間）、講師は長・短期専門家及びC/Pが務めた。モデル地域における現地調査を下に研究発表方式で行った。聴講者はスタッフセクションや部外から参加があり、情報の交換、共有化や技術移転が行われ、BRPM技師の学術的レベルアップと活性化へ大きく貢献した。又セミナー講義録を下に加筆修正を加えマニュアル副読本も4種類作成された。

IV 活動内容及び業務実績

1. 業務実施計画：①基本計画図（PDM）②全体活動計画（PO）、③年次活動計画（APO）④暫定実施計画（TSI）

2. 主な活動

- ① スタッフセクション（c/p）32名配置、1回／2週間：モ側（局長・3部長）と定例会議
② 計画の達成度：上記業務実施4計画は順調に推移し、90%以上は達成された。
③ 供与機材（分析装置：ICP（プラズマ方式）、POSAM（変質鉱物簡易同定方式））の設置と操作方法（座学・現地実習）を修得した。
④ モロッコ北部・中部・南部のモデル地域候補を文献・予察・概査・精査・地下水探査を経て4地域から2地域（主に鉛、亜鉛、銅、銀等）に集約し、C/Pへ野外調査のOJTを行った。併せてセミナーも48回開催した。
⑤ 探査マニュアル「モロッコの探査手法と技術及び主要鉱床・329P」をモデル地域の探査（地化学、物理探査）の結果に基づき作成（専門家指導の下、BRPM技師32名執筆）。

3. 機材の活動状況、供与効果及び改善点：分析装置（ICP、POSAM）、四輪駆動車他機材の供与及びその活用により、プロジェクトの活動がスムーズに行われた。

V プロジェクト実施に伴う日・モ両国の投入実績

1. モロッコ側：

- ① 人員（26名）及び施設提供：マニュアル専属担当1名、専属運転手2名、秘書1名、技師補助2名他、専門家執務室（個室）6室、鉱物資源探査研究所
② 資金：21,79百万DH（約392百万円）

2. 日本側：

- ① 原課：経済産業省資源エネルギー庁 資源・燃料部 鉱物資源課
② 実施窓口：JICA鉱工業開発協力部 鉱工業開発協力課
③ 国内委員会：（財）国際鉱物資源開発協力課（JMEC）
④ 人員：派遣専門家（26名）：長期7名、短期19名、
⑤ セミナー開催講師：長期専門家5名×21回、短期専門家13名×27回
⑥ 調査団派遣実績：6回
⑦ 資金：機材供与分13点：62,121千円、現地業務費：
⑧ 研修員受け入れ：合計7名（地化学探査、ICP等分析、鉱床理論、地質他）

- ⑨ 主な機材供与：12点、四輪駆動車、コピー機、ICP, POSAM, A3スキャナー他

VI 総括：

1. 本プロジェクトは過去30年に亘る我が国とモロッコの鉱物資源分野への総括的意味も含めて開始されたものである。BRPM側はプロジェクト開始早々からスタッフセクション (C/P) を配置し、終了時点では17名から32名に増員された。又スタッフセクションの設置により、探査計画、活動計画を総合的に進めて行く目的が

達成され機能が十分発揮される事となった。

2. プロジェクトの計画・運営・管理においては2回の運営指導団と1回の終了時評価調査団の指導の下、PDM, PO, APO, TSI 及びモニタリング評価等の評価・運営・指導がなされ、より現状に合った計画の見直し、修正が行われた。
3. モデル地域は当初の4地域から2地域へ絞り、OJTによる現地調査及び調査結果の解析を行い実践的な総合探査が可能となった。

注) 添付資料は割愛させていただきます。



マーシャル諸島での協力隊活動と帰国後

宮崎県海外協力協会会長
岩切環境技研株式会社 岩切 康二

1. はじめに

私は1998年7月から2000年7月までの2年間、青年海外協力隊としてマーシャル諸島共和国に派遣されていました。職種は数学教師で、首都マジュロから約200km離れたジャルートにある国立ジャルート高校にて、現地の高校生相手に数学の指導を行って来ました。その2年間のマーシャル諸島での活動の紹介と、私の帰国後について簡単に報告いたします。もう10年以上前のことですし、専門的な話ではない拙文ですがご笑覧下さい。

2. マーシャル諸島ジャルート環礁の紹介

マーシャル諸島は、太平洋のど真ん中に浮かぶ小さな島国で、34の環礁や島から成り立つ美しい島国です。人口は約6万人で、その半分は首都のマジュロに住んでいます。公用語は英語とマーシャル語です。過去にはドイツ、日本、アメリカが統治していた時代があり、日本ではマーシャル群島、南洋群島と言った方がご存じの方は多いのではないのでしょうか。また、核実験が行われたビキニ環礁のある国と言え、ご存じの方も多いかと思えます。

日本の統治は第一次世界大戦後の1914年に始まり、太平洋戦争中の1944年まで続きました。日本統治時代は、私の赴任していたジャルートには南洋庁ヤルー

ト支庁が置かれ、マーシャル諸島の中心都市でした。当時は約700人の日本人が住んでおり、非常に栄えていたそうです。しかし、1942年からはアメリカ軍による制圧が始まり、多くの犠牲者を出しました。私の赴任したジャルートでも爆撃が続き、廃墟と化したそうです。私が赴任していた当時、70歳前後の方(1930年頃に生まれた方)は、日本語を非常に上手に話すことができ、日本語の歌をご存じでした。「学校に行って国語(日本語)を勉強した」と話され、当時のことを時々聞かせていただきました。日本とアメリカの戦争に巻き込まれ、辛い過去を持つマーシャル諸島ですが、日本人に対する嫌悪感や差別はほとんどなく、2年間の活動を行う上でその点は非常に幸運でした。

3. 私の協力隊活動

マーシャル諸島に当時2校あった国立の高校のひとつジャルート高校で数学の授業を担当しました。大学を卒業したばかりで協力隊に参加した私は、「最初はカウンターパートと一緒に授業をして少しずつ…」という甘い考えを持っていましたが、9月の始業式の後に校長から週25コマの授業をお願いと4クラス分の名簿を渡されました。しかも、カウンターパートはマジュロに行っていて、いつ帰ってくるか分から

ないと言われる始末。青年海外協力隊という、現地の人に野菜の作り方などの技術の指導をしたり、一緒に井戸を掘ったりというイメージがあるかもしれませんが、私の場合はマーシャル人も行きながら離島での完全マンパワー協力隊でした。

ジャルート高校には私が初めての協力隊員でしたので、生徒のレベルなども全く分かりません。生徒に簡単な計算問題をさせながら、この子達に必要なことは何だろうか、どういうことを教えたなら彼らの将来のためになるのだろうか、と手探り状態での授業の開始でした。教室の後ろの開かずの扉になっている棚からは、埃まみれになった全く使われていない数学の教科書を引っ張り出しては、見えそうなものがないか物色したりもしました。生徒達のレベルも分かってきてからは、習熟度別に授業を組み立て、どうにかまがりなりにも数学の授業を行えるようになってきました。

青年海外協力隊の数学教師という仕事を通じて、いつも考えていたのは、自分のやっていることが、生徒達やマーシャル諸島にとって、将来どう役に立つのだろうかということでした。当時、日本の教育界では「生きる力」ということが盛んに言われていました。では、マーシャル諸島での生きる力とは何でしょうか。生徒達と一緒に遊びに出かけると、彼らは非常にたくましい。海に行けば、潜って魚やエビなどを捕ってきてくれます。喉が渇けば、10数メートルあるヤシの木に登って、ヤシの実を落としてくれます。両方とも私にはできません。彼らにはもうすでに「生きる力」があるではないか！

ジャルート高校は、ジャルート環礁からだけでなく、周りの環礁からも生徒が入学してきます。したがって、生徒達の半分は寮生でした。寮と言っても個室があるわけではなく、出身の島ごとに別れた大部屋で寝泊まりをしていました。薄暗い大部屋で机も椅子もない状態でしたので、学校が終わり放課後のスポーツに汗を流した寮生達は、夜になると何もやることはありません。村をぶらぶらするか、寮でごろごろしているか。それでは若者のパワーがもつたいないと思い、夜に教室を開放して、ナイトクラスと称して授業をすることにしました。参加は自由、7時から9時まで教室を開放するから、勉強したいならitok！（マーシャル語：「来い」という意味）。最初のうちは、誰も来ないこともたびたびで、1人でも来ればいい方でした。しかし、暇をもてあまし

ている生徒達にもナイトクラスのことが広まり、コンスタントに生徒が参加してくれるようになってきました。もちろん10分だけ来る子もいれば、来てもおしゃべりだけして帰る子もいます。それでも、生徒達が自分から数学を学びに来てくれて、いろいろな数学の問題に頭を抱えながら挑戦してくれる。教師として非常に充実した時間でした。

それから、1人の生徒が言った言葉が私の2年間の活動を支えてくれました。私が「君は将来何の仕事がしたいの？」と聞くと、「自分は将来小学校の先生になりたい」という。「なぜ？」と聞き返すと、「自分は離島の出身で小学校はあったが、算数を勉強したことはほとんどなかった。先生に教えてもらった数学を自分の島で子供達に教えてあげたい」と言いました。活動当初は、自分は単なるマンパワーで、技術移転とは関係ないと思っていましたが、教師という仕事はその活動自体が技術移転であり、長い目で見ると生徒達に数学の楽しさや、論理的な考え方を伝えることができたのではないかと感じています。

4. 帰国後

私は協力隊に参加して本当に多くのことを学ばせてもらいました。ここでそのすべてを述べるのは不可能に近いのですが、海外から日本や宮崎を見ることができたことや、地球環境問題に直に接することができたことは私の帰国後に大きな影響を与えました。特に後者の地球環境問題については、マーシャル諸島と聞いてピンと来た方もいらっしゃるかもしれませんが、ツバルなどとともに、海面上昇の影響をまともに受ける国です。私の住んでいた宿舍のすぐ裏が海で、夕方によく海に沈み行く夕日を眺めていたのですが、大潮の満潮の時には地面とほぼ変わらないような高さまで水面が上がります。環礁のラグーンは波も静かで穏やかな水面なのですが、その水面の近さに思わず恐怖さえ感じてしまうこともありました。そのような経験は私に環境問題を考えさせるきっかけとなり、現在は宮崎で自然環境に関する仕事に従事しています。自分の今やっている仕事ですが、直接に海面上昇などの地球環境問題に関係しているわけではありませんが、「Think globally, act locally.」をモットーに自分にできることからという考えで活動しています。

昨年の4月からは、家族や多くの人の支えで、宮崎大学大学院で森林について学ぶ機会を与えていただきました。まだまだ、大学と仕事の両立にもがき

苦しんでいます、しっかりと学び直し、宮崎の環境やマーシャル諸島、そして地球規模の環境問題に貢献できるように努力していきたいと思っています。

5. 宮崎県海外協力協会（MOCA：モカ）の紹介

最後に、宮崎県海外協力協会の紹介を致します。宮崎県海外協力協会とは、JICAボランティア（青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティア、日系社会シニアボランティア）経験者からなる会で、宮崎県内各地にいる約200名の会員で活動しています。20代から70代まで、職種も多種多様な異世代異業種のネットワークです。会員それぞれが地域に根ざして、いろいろな活動を行っ

ておりますので、興味のある方はぜひご連絡いただけたらと思います。また、宮崎県内にある3つのJICA関連団体（宮崎県JICA派遣専門家連絡会、宮崎県青年海外協力隊を支援する会、宮崎県海外協力協会）で協力しあいながら、JICA応援団として日本の、そして宮崎発の国際協力や途上国支援のお手伝いもしています。専門家連絡会のみなさまとは、これからもご一緒する機会が多いと思いますので、ぜひご指導をよろしくお願いいたします。

末筆ながら、宮崎県JICA派遣専門家連絡会誌での発表の機会を与えてくださった位田教授と佐伯教授には感謝申し上げます。



マーシャル諸島での生活（ホームステイ）



授業風景



ジャルット環礁中心地
（ヤルット支庁のあった場所）



アルゼンチンでの国際協力に携わって

宮崎大学農学部獣医学科産業動物伝染病防疫学講座
宮崎大学産業動物防疫リサーチセンター 乗 峰 潤 三

JICA専門家として、1992年から4年間、アルゼンチンのラ・プラタ大学獣医学部で産業動物のウイルス感染症に関する研究協力に従事しました。PCRがやっと普及し始めた頃で、日本から供与された一台のPCRの機械が研究室の真ん中の、鍵付きの部屋に保管されていました。細胞培養用のデイスポのフラスコもたくさん供与されていましたが、それも大切に保管されていて、使われているのは昔ながらのガラスのフラスコでした。まだ若かった私ですが、JICAの専門家という事で、立派な椅子と机のある一番いいオフィスをいただきました。そんな風に多少緊張感ある中で、アルゼンチンでの仕事や生活が始まっていったのですが、気持ちがほぐれ

るのに時間はかかりませんでした。アルゼンチンの人達は陽気で、人懐こく気さくで、初めて会った日から楽しい友人といった関係になれます。アメリカのイリノイ大学で親しくなった家族もアルゼンチン人の家族で、ワシントン州立大学で出会った生涯の親友カルロスもアルゼンチン人という巡り合わせで、偶然なのかもしれませんが私のルーツはアルゼンチンにあるようにも思えます。

【プロジェクト】

私が参加したプロジェクトは、ラ・プラタ大学獣医学部研究計画という案件（1989年～94年）で、その後94年から2年間のフォローアップ協力という形で続いていったものです。アルゼンチンの牧畜業発

展のために、国立ラ・プラタ大学獣医学部家畜伝染病・公衆衛生分野で研究協力を行い、それを通じ研究者の養成を行なっていくというプロジェクトでした。私が配属されたのは、その中のエチエベリアガラ教授を長としたウイルス学分野でした。仕事は、牛ヘルペスウイルス、牛白血病ウイルス、豚ヘルペスウイルス、馬ヘルペスウイルス、馬インフルエンザウイルス、馬伝染性貧血ウイルス、鶏伝染性貧血ウイルスを中心としたウイルス性感染症に関する診断、疫学的調査研究が主でした。フィールドワークとしては、セデイベという地域診断診療所でヨーネ病診断などにも従事しました。研究協力ですので、日本から派遣されるのは殆どが大学の先生方で、東京大学からは見上彪先生、高橋英司先生などの多くの偉い先生方が来られました。宮崎大学からは山口良二先生が来られ、またその他の大学からも大勢の先生方が本プロジェクトには参加されました。フォローアップ終了後もアフターケアという形で3年間協力を継続していますので、参加された先生方の数は延べで20名を超えられると思います。

[ラ・プラタ市]

ラ・プラタ大学のあるラ・プラタ市はラ・プラタ川沿いの歴史ある街で、首都ブエノスアイレスから南東へ55km程の所にあります。市内は通りがきれいに四角に区切られていてわかり易いのですが、それをまた斜めに走る道路があるため、6方向に出口のある交差点がところどころにあります。このロトンダと呼ばれる交差点では車が混む時など、出ていくタイミングが合わず、合うまでクルクル回っている事がよくありました。また、回っているうちに方向がわからなくて全く違う方向に出してしまうこともありました。市の人口は56万人くらいなのですが、サッカーの盛んなアルゼンチンですので、当然ラ・プラタ市にも地元サッカークラブがあります。それがエストウディアンテスとヒムナシアという2つのチームで、ラ・プラタ市民はひいきのチームで真二つに分かれます。この2チームが地元でやる試合を見に行こうと思ったのですが、知り合いから危険だからやめた方がよいと言われ、行くのを止めました。大学は市の少し外れにありますが、その近くには恐竜の化石のコレクションで有名なラ・プラタ自然科学博物館があります。ここは、貴重な展示物が多いためJICA関係で大学に来られた殆どの日本人の方が一度は訪れる博物館です。ウルキッサには日本人

コロニーがあり、日本人移民の方々が日本人より日本人らしく生活しています。日本人学校もあって硬式野球をやっていましたので、高校生達のチームに入れてもらって2試合ほどやらせてもらいました。

[ラ・プラタ大学]

1905年に設立されたアルゼンチンでも伝統ある名門国立大学です。学生数は7万人を超えていますが獣医学部を初め他学部のキャンパス内は植林されて緑が多く、マンモス校的な雰囲気は全くありません。

[南北に長い国、アルゼンチン]

ブエノスアイレスから北へ1000km以上も行くと亜熱帯地域に入り、そこには有名なイグアスの滝があります。パラグアイ、ブラジルとの国境で、どの国からアプローチしてもすばらしい滝に出会えます。ブエノスアイレスから350km程南へ行くと、マルデプラタという夏のリゾート地があり海水浴でにぎわっています。私が好きだったバリローチェという町は、ラ・プラタから1500km程南西へ運転していきますが、南米のスイスと言われ、きれいな湖と山に囲まれたスキーリゾートの町です。夏に2度ほど家族とその美しい自然の中でキャンプをしました。またパンパを抜けた南大西洋岸にはペンギンの生息地プンタトンボ、鯨を間近に見られるバルデス半島などもあります。南極に近いフエゴ島にはきれいな町ウスアイアがあります。この町では夏場、日が真夜中まで沈まないのが不思議な感じでした。このようにアルゼンチンは北から南に細長い、様々な自然に恵まれた美しい国です。

[ワインと牛肉のおいしい国]

アルゼンチンは年間1人あたり1頭の牛を食べると言われている牛肉消費国です。アサドを代表とする肉だけではなく、腸管、胸腺、血液（ソーセージ）まで全てバーベキューにして食べます。私もチンチュリン（腸管）とモジェハ（胸腺）が大好きで今アルゼンチンに行けるとしたら真っ先に食べるものの一つだと思います。それにアルゼンチンは知る人ぞ知る、安くておいしいワインが堪能できる国です。色々種類があってもどれもおいしいのですが、よく飲んだのはビアンチボルゴーニャという赤ワインで、安くておいしく日本人仲間にも人気がありました。一番安いワインはダマワナという3リットルビンに入っているもので、3ドルくらいだったと思いますがまあまあ悪くないワインでした。それらのワインの殆どがメンドーサというアンデス山脈の麓の町で作ら

れています。ラ・プラタからは1300km程ドライブして行かなければいけません、綺麗な小さな田舎町で2度程行きました。ドライな気候や適度な温度などがワイン作りに適しているのだと思います。陽気なアルゼンチン人達とアサド料理を食べながらワインを片手に談笑するひとは、非常に幸せな時間でした。

【最後に】

国際協力は基本的に技術協力で、長期にわたって様々な技術を伝えていかなければなりません。文化、生活習慣、考え方などの違いによってコミュニケーションが取れなければ全く協力どころでは有りません。もちろんコミュニケーションの大切な道具である言葉については言うまでもありません。ただ、言葉が通じるだけで協力がうまく行く訳でもありません。国を知り、人を知り、友人を築いていくことが重要だと思います。アルゼンチンでは、人と人とのつながりを教えてもらった気がします。単純にどこへ行っても優しくしてもらったという気がします。いい国際協力事業に参加してもらえてラッキーでした。富める国がどちらの国なのかわからない気もしました。お別れ会の時、「アルゼンチンの方が日本より豊かだと思います。いずれアルゼンチンが日本への経済援助する事になると思いますので、

その折は私の事を忘れずによろしく御願います。」と挨拶したら、みんな笑っていましたが、私は半分本気でした。

最後に、アルゼンチンではいろいろな人にお世話になりました。どうもありがとうございました。特にアルゼンチンでも日本でも、本当に良くしてもらった2人先生方、若くして亡くなられた板垣先生、帰国して会えないまま亡くなられた高橋先生に心から感謝致します。楽しい思い出がたくさんできました。ありがとうございます。一緒にまた、アルゼンチンに乾杯、と言いましょ。



「アルゼンチン人もブエノスアイレスのストリートタンゴを見学に行き、タンゴの練習をする。」 親友カルロス撮影



宮崎大学での勤務を振り返り、思うこと

宮崎大学国際連携センター

吉成安恵

私は2011年9月にJICA職員の立場から宮崎大学国際連携センターの教員という立場で勤務させて頂くようになってはや2年半が経ちました。まず大学で勤務して実感したのは、大学の教職員は大変忙しいということです。どの組織/個人も多忙でない組織/個人はそうないと思いますが、この多忙と感じた意味は、私のかつての大学教員のイメージとのギャップです。私の浅はかな理解では大学教員は、その個々の専門に関係する研究（研究の実施と発信）と教育（教育の実施と評価）が所掌であると思っておりました。実際は、それ以外に学内の組織運営に関する委員会、タスクフォー

スや学生の学習・生活環境整備（問題やリスク対応含む）に関する各種会議への参加や制度改訂の素案づくりなど専門の研究や教育とは別に多くの業務に従事されており、多様な業務で忙しい、という実感です。また、広い経験と学内外の信頼のある先生ほど様々な専門以外の役割を担われているのではないかと思います。その一方で業績評価にあたっては専門の研究成果、論文実績は優先して求められています。更に昨今では、日本の大学改革やグローバル社会に伴う国際化への対応も加速する必要があり年々その組織全体に関わる業務も増えているという状況にあります。

その中で私が主に関わらせて頂いている“国際協力の推進”は、宮崎大学においては大学の正式な運営方針において地域・国際貢献の中に位置付けられており、組織的に推進のルールが敷かれています。ただ、個々の教職員において、上記のような状態において、一日24時間、365日という限られた時間のなかで実際に推進していくとなると決して容易ではありません。厳しい状況にも拘わらず、宮崎大学での国際協力事業はこれまで着実に実績として増えています。その背景には、2つあると思います。一つは、これまでにJICAの専門家、青年海外協力隊、または研修員受入事業に携わって頂いた教職員の方々が学内の様々な部署におられて、水面下での推進役になっていただいていること。もう一つは、先に述べたとおり大学組織として国際協力をコミットしており、更には国際協力が大学の国際化や教育におけるグローバル人材育成にも繋がるとの認識があるからだと思います。これにより、

JICAとはこれまで関係していない教職員の方々からも理解と協力が得られ、短期/長期のJICA研修員の受入や途上国での国際協力事業への支援、また宮崎における市民向け国際協力イベントの共催や中高生等を対象とした国際協力シンポジウムの実施等を推進することが出来たと思います。このどちらか一つでは不可能であり、両面があつての結果だと考えます。

私は、国際協力を推進することを使命とする組織の中でのみ働いてきましたが、この宮崎大学で勤務することにより、国際協力を違う視点でみる経験をさせて戴きました。これらの経験をきちんと整理し、また国際協力の現場に反映することがお世話になった方々への恩返しであり、私の役割だと考えております。まだまだ残された期間で成すべきことは多くあります。十分に達成は出来ないかもしれませんが、最後まで自分の与えられた役割に向かって努力して参りたいと思っています。



「宮崎から世界へ！GLOBALINK —世界とつながっている私達2014—」

JICA宮崎デスク・国際協力推進員
崎田佳予子

2014年1月25日(土)イオンモール宮崎にて、宮崎県内で活躍する国際協力NPO/NGOの4団体(通称:宮崎国際協力ネットワークICNM)、宮崎大学IRISH、宮崎県JICA派遣専門家連絡会、宮崎県青年海外協力隊を支援する会、宮崎県海外協力協会、JICA九州との合同イベントが無事終了致しました。

イベント内容は、各団体の活動紹介パネル写真展示、JICA地球ひろば体験型模型の展示、世界の教育事情パネル展、地雷撤去作業体験、水がめを持ってみよう、世界のクイズ、世界の挨拶カードゲーム、民族衣装の試着体験、世界の国旗や布の缶バッジ作り、ステージイベントなどが行われました。

ステージイベント「おながくとおはなしの森」では、アナウンサーの横山美和さんによる、絵本の読み聞かせが行われました。

ピアノや太鼓の音色に合わせ、横山美和さんの素晴らしい読み聞かせで会場を魅了しました。今回登場し

た絵本は、アフリカやアジアの物語、そして地雷を分かりやすく説明したお話でした。会場は多くの子ども達が来場し大変賑やかな雰囲気でした。

また、「木村つづくの世界各国旅話」も登場。

世界28カ国を旅して歩いた木村つづくさんが、現地で撮った写真をスクリーンに映しながら来場者の皆さまに分かりやすく説明。目を輝かせ聞いている子ども達の姿が印象的でした。世界を旅して歩いた木村さんだけあって、お話する内容もワクワクするような知らない話ばかりで子供も大人も楽しめるトークイベントでした。

今回は、日南市教育委員会が実施する「小村寿太郎国際塾」の塾生58名(小学生)の皆さんが、体験学習としてこのイベントを活用していただきました。各団体ブースをグループごとに回り、高校生ボランティアの皆さんが団体説明や小学生グループのお世話をを行うという形で実践しました。

高校生の中には、「小学生と触れあうことがあまりないので、話したり仲良くなれてよかった」「教師が夢なので、このような機会をいただきプラスになりました」「小学生が興味深く参加できるイベントでよかった」など小さい子供達と一緒に学び楽しむことができるイベントであったのだと感じています。

来場者のなかには、学生さん、在住外国人のみならず、ご家族連れなど、さまざまな年代層の方々がいらっしやっていました。

「もっと多くの人に知って欲しい」「多くの団体が宮崎から世界で頑張っているのだと知った」「分からない事がたくさんあったけれど参加して理解することができた」「世界には多くの問題を抱えた人達がいるのだと知った」「私もいろんな活動に参加したいと思った」「多くの人にこのイベントや参加団体の活動を知って欲しいと思った」など多くのご意見を頂きました。

来場者数は1326名。本当に多くの方々にご来場い

ただきました。

国際協力をめざし活躍されている団体と共に例年イベントを実施することで、より多くの宮崎県民の皆様にも周知できればと考えています。そして、グローバル人材育成のため、世界を視野に入れる機会を提供することにより、子ども達そして学生さんに国際社会に対するモチベーションを高めてもらう機会になればと思っています。

ご協力して頂いた皆さまありがとうございました。

JICAデスク宮崎国際協力推進員として3年間務めさせていただきました。

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の皆様をはじめ、JICAファミリーの皆様には様々な場面でご助言ご指導いただき、またイベント等でもご一緒させていただくことができました。

感謝の気持ちでいっぱいです。大変お世話になりました。どうもありがとうございました。



会場の様子



スタッフ



宮崎大学モー君大人気!



スタッフ全体



賑やかな会場の様子



説明を受ける子供たち



木村つづくさん世界旅話



読み聞かせ
「おはなしとおんがくの森」

編集後記

JICAエキスパートみやぎ第16号をお届けいたします。本連絡会の発展のため皆様方の忌憚のないご提案、ご意見をお待ちしております。ご連絡は、下記までお願い申し上げます。

会長：位田晴久(inden@cc.miyazaki-u.ac.jp)

幹事：大野和朗・佐伯雄一・山口良二

(@の前をそれぞれohnok yt-saeki a0d402u に変えて下さい)

事務局：〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学農学部内